

## 《資料》

### 第二次沖縄民事陪審裁判（6） —1965年秋の訴訟記録—

陪審裁判を考える会（訳）

荒川 歩、飯 考行、黒沢 香、四宮 啓、滝田清暉、新倉 修、西村 健、齋藤 哲

This paper is a translated version of the second civil jury-trial record in the occupied Okinawa, Japan, in July 1965.

Research Group on Jury Trial

#### <目 次><sup>1</sup>

- 1 陪審員選定手続（Jury Selection）
- 2 正式事実審理（Trial by Jury）
  - （1）陪審員の宣誓（Oath by Jury）
  - （2）冒頭説示（Preliminary Instructions）
  - （3）冒頭弁論（Opening Statement）（ヘイグッド原告代理人）
  - （4）当事者尋問 原告ツルコ・ロバーズ氏宣誓
    - \* 以上、マテシス・ウニウェルサリス第22巻1号所収
  - （5）原告側証人尋問 証人チョウヘイ・トミシロ氏宣誓
  - （6）原告側証人尋問 証人裁判所書記官ダルシィ・M・エリオット氏宣誓
  - （7）原告側証人尋問 証人ジョージ・ホール氏宣誓
    - \* 以上、マテシス・ウニウェルサリス第22巻2号（2021年）所収
  - （8）原告側証人尋問 証人ヘイグッド原告代理人宣誓
  - （9）非公開審理
    - \* 以上、マテシス・ウニウェルサリス第23巻1号（2021年）所収

---

1 原文に目次はなく、訳者らが便宜的に作成したものである。

- (10) 被告側証人尋問（非公開審理） 証人エドワード・N・ハリマン氏宣誓
- (11) 被告側証人尋問 証人ジョン・ベラミー氏宣誓
- (12) 被告側証人尋問 証人エドワード・N・ハリマン

＊以上、マテシス・ユニウエルサリス第23巻2号（2022年）所収

イ 反対尋問（ヘイグッド原告代理人）

ウ 再主尋問（マクレラン被告代理人）

エ 再反対尋問（ヘイグッド原告代理人）

オ 再々主尋問（マクレラン被告代理人）

カ 再々反対尋問（ヘイグッド原告代理人）

＊以上、マテシス・ユニウエルサリス第24巻1号（2022年）所収

（同日午後3時50分：休廷）

（同日午後4時5分：開廷）

（同日午後5時8分：休廷）

（10月29日金曜日午前9時45分：陪審及び訴訟関係者参集）

（同日午前9時52分：陪審退廷）

（同日午前10時10分：非公開審理再開）

（同日午前11時7分：非公開審理休廷）

（11月1日月曜日午前9時40分：非公開審理再開）

（同日午前9時55分：非公開審理終了）

＊以上、本号所収

- (13) 最終弁論（マクレラン被告代理人）

- (14) 最終弁論（ヘイグッド原告代理人）

### 3 説示（Instruction）

### 4 評決（Verdict）

（非公開審理は1965年10月28日午後3時50分から4時05分まで休廷し、同一メンバーが出廷して再開された。）

ヘイグッド代理人： 彼らは賠償責任を補償されるのであって、損失に対してではありません。損失については何も触れていません。賠償責任を補償するのです。

裁判長： 被保険者が法的に支払い義務がある総額を補償するということです。

ヘイグッド代理人： 損失を現実に支払うことは必要ないのです。つまり、彼らは現実に支払いましたが、これらの約款は支払う義務についてだけ論じています。法的に支払わなければならない必要があると。

裁判長： 何が言いたいかわかりました。被保険者が法的に支払義務を負うこととなった総額を被保険者に補償すると。被保険者が現実に支払ったものとは言っていない。そこがあなたのポイントですね？

ヘイグッド代理人： まったくその通りです。それからいくつかの引用を『アメリカ法大全』（Corpus Juris）<sup>2</sup>から—

裁判長： ちょっと待ってください。その区別はわかりました。

ヘイグッド代理人： 裁判長、ここにいくつかの判例があります。これらでポイントを明確にすることができますと思います。

裁判長： ちょっと待ってください。

ヘイグッド代理人： 裁判長、私が調べたこれらの文献からの引用をお示してもよろしいでしょうか？

裁判長： どうぞ。

ヘイグッド代理人： Cappel事件、C-a-p-p-e-l 対合衆国、FidelityとGuaranty Company、ニューハンプシャー州のケースです。手元には巻数と頁数はありません。Atlantic120巻556頁に報告されています。そしてこのケースでは、約款は、賠償責任を補償する契約であって、損失の補償ではないということが示されています。したがって当該企業は、「法によって課せられた責任、すなわち、自動車の所有、保有もしくは使用による事故の結果としての身体的傷害もしくは死亡に対する損害賠償請求に起因する賠償責任について被保険者に補償すること」に同意しています。これは私たち

---

2 訳者注 コーパス・ジュリス、アメリカ法大全。アメリカで刊行された法律百科全書（英米法辞典、203頁）

が本法廷で見出したこととほとんど同一です。言い換えれば、賠償責任の補償と損失の補償とを区別しているということです。そして同じケースで、当該約款は、判決に基づく賠償責任の補償を行うものであり、被保険者の車によって死亡した者の遺産管理人は、被保険者に判決内容が履行されるだけの資力がない場合に、判決内容の支払いのため約款に基づく利益を請求する、保険者に対する衡平法上の請求を維持することができる、と確認されています。この点はまさに本件の核心です、裁判長。

さて、それに加えて、ここにRogers v. Youngs, Y-o-u-n-g-s, 256 Michigan 21, 239 Northwest 511があります。このケースでは、責任賠償補償約款は、被保険者に対する強制執行令状が奏功しなかった場合、負傷した被害者は保険者に対する訴訟を提起することが許される、との原則が確認されています。

マクレラン代理人： 裁判長、もし強制執行で満足できなかった場合には、私は、それに同意します。本件の場合には、記録上現時点で、強制執行令状が発付されていません。

裁判長： もし強制執行で回収できなかったのであれば、被保険者は損失を受けていないですね。

マクレラン代理人： そのとおりですが、少なくとも一足飛びではなく、何かを見つけるための試みが必要なのでは—

裁判長： それは全く別の問題であると思われます。

ヘイグッド代理人： それは例外または欠如の問題—

裁判長： そうです。

ヘイグッド代理人： 強制執行あるいはその欠如は、この説示とは関係ないと思います。『アメリカ法大全』からいくつかの引用をコピーしてきました。裁判長が興味を持たれると思います。1つは、アメリカ法大全36巻1057頁です、そこではこう述べられています—約款が損害に対する補償の理論と矛盾する条件を含んでいる場合、あるいは明らかに損害賠償責任に対して保証する意図が示されている場合には、そのように解釈される。それからもう一度アメリカ法大全の36巻の1096頁ですが、そこにはこう述べられています—賠償責任補償契約の場合、保険者に対して行使される権利は被保険者が賠償責任を負えば直ちに成立する。そして保険者が被保険者に対して支払うべき約款上の義務は、被保険者が弁済その他被害者の請求もしくは判決に基づく義務を弁済その他で果たしていないとしても。

一裁判長、これらは法律でははっきりしませんが、もう少しお時間をいただければ、もう少し完全な要約を提供することができます。

裁判長： 証拠では、被告提出の証拠A、B、Cはすべて、補償に関する限り、ここでは非常に重要ですが、被保険者が損害として法的に支払義務がある総額を保険者が被保険者に補償することの合意に関するものです。言い換えれば、被保険者が損害賠償を実際に支払った事実が必要との文言はなく、被保険者が法的に支払義務があるとされる総額を補償することが求められているのです。これらの文言は、これらの証拠の全てで使用されています。

ヘイグッド代理人： 裁判長、アメリカン・ジュリスプルーデンス29巻のコピーをお持ちですか？ 裁判長が注目されるであろう別の条項があります。それはいわゆる「ノーアクション条項」<sup>3</sup>です。「保険」に関する1343項の「さらに」で始まる文章を読んでいただけますか？

裁判長： ここですか？

ヘイグッド代理人： はい、「さらに」で始まる文章です。

裁判長： さて、私たちのケースの問題点は、使われている「補償」という文言です。

ヘイグッド代理人： 賠償責任約款とは何か、損失補償約款とは何かを決定するに際しては、これはノーアクション条項であることが重要と言いたいのです。なぜなら、ノーアクション条項には、被保険者の支払義務総額が裁判の判決によって決定されるまではいかなる訴訟も存在してはならないと書かれているからです。これによれば、ここでは、補償約款とするという意味では真のノーアクション条項ではありませんが、ノーアクション条項では、被保険者が現に払う、損害額を現に支払うまでいかなる訴訟も行われてはならない。そのあとに補償、つまり保険会社に対する訴訟が成立するのです。しかし本条項は、ノーアクション条項が被保険者の現実の弁済を必要としない限り、と述べていることから、補償約款ではなく、賠償責任約款と解されます。

裁判長： さて、ここが興味深い点です。

ヘイグッド代理人： 裁判長は約款があいまいな文書をお持ちですね。疑問は

---

3 訳者注 責任保険約款において、被保険者と被害者との間の訴訟の判決または被保険者・被害者・保険者間の和解により損害賠償額が確定した後初めて被保険者が保険者に対する保険金請求訴訟を提起できると規定する条項（英米法辞典、586頁）。

被保険者に有利に、保険会社に不利に解決されなければなりません。なぜなら、その約款を作成したのは保険会社だからです。

裁判長：　ところで、皆さんは法廷を5時きっかりに出なければなりませんか？

ヘイグッド代理人：　いいえ、裁判長。

マクレラン代理人：　いいえ、裁判長。

裁判長：　ヘンネケさんはいかがですか？

速記官：　いいえ。

裁判長：　結構。このケースは興味深いです。第三者である保険金受取人が訴訟を提起する権利の問題を取り扱うのは初めてです。さて、あなた方はこの引用を希望するでしょう。利用されることを勧めます。それはオハイオ州損害保険会社対バックウィズ事件、フェデラル・レポーター、第2次シリーズ<sup>4</sup>、74巻75ページです。懸念がない部分を引用するつもりですが、この判例を差し上げましょう。そこではこう述べられています。「契約の主たる目的が契約当事者の利益のためであるとしても、第三者のために権利を発生させ、あるいは義務を負う場合、法は第三者に救済を与える」。それから、「第三者である保険金受取人は、契約締結時に契約について知らされず、又は知らなかったとしても、特定されるのであれば、契約の効果を主張できる」。

さて、議論していた点に戻しましょう。賠償責任保険約款のタイプと、補償するタイプ—つまり、「これら2つのタイプの区別は、長期にわたるものであり、またよく知られている。ある契約がどちらと判断されるかは、もちろん、保険契約によって明らかにされる契約者の意図による。当事者の意図が、被保険者が損害賠償を弁済しない限り、また弁済するまでは保険者は責任を負わないというものであれば、『訴訟の判決を履行するために、被保険者自身によって実際に認められ、支払われた賠償を補償するために被保険者自身が提起する場合を除いて、保険者に対して訴訟を提起することはできない』旨の条項を契約に挿入することが変わらぬ習慣となっている。このようなノーアクション条項を含まないが、被保険者が法によって認められた損害賠償責任に基づく損失を保証すること、また被保険者が、約款がカバーする他人を負傷させ、財産を毀損した場合に直ちに保

---

4 訳者注 Federal Reporter, 2nd. 合衆国控訴審裁判所判例集第2次シリーズ（英米法辞典、338頁）。

險者に通報しなければならない条項を含んでいること、そしてこれらの負傷や毀損を原因とする請求について保険者の同意なく和解をしてはならないこと、保険者は、被保険者に対して提起されるいかなる訴訟に対しても被保険者の名前で、被保険者のために防御する等の約款は、極めて一様に、賠償責任保険約款であり、単なる損失保証契約ではない」。

さて、私がとりわけ関心があるのは、これらの証拠のどれにも一被告提出証拠A、B、Cのことを言っているのですが—「損失」という文言を使っていないという事実です。言い換えれば、これらの証拠は、被保険者が法的に支払義務があることになった場合のあらゆる損失を補償するとしていないのです。しかしこれらの証拠は次のように言っています。「被保険者が、自動車の所有、保有、運行による事故によって、あらゆる人が被る身体傷害、病気、それらに起因する死亡を含め、法的に損害賠償支払義務があるとされる総額について、被保険者に補償すること」。これは、これらすべての証拠の「保険合意」の第1項にあります。言い換えますと、これはヘイグッド代理人が先ほど引用の際に指摘されたように、1つの引用の中で、賠償責任約款の中にある賠償責任に対する補償に関する言及がありましたが、賠償責任に対するあらゆる補償をはっきりと指しているように見えます。私がなにを言いたいかわかりますか？

ヘイグッド代理人： おっしゃる通りです。それがこの引用が意味するところ  
です。もし賠償責任に対する補償があれば、それは一般的に、また普通は、それは賠償責任と呼ばれます。もし損失に対する保険であれば、それは普通、補償約款、損失に対して補償する補償約款と呼ばれます。それは損失に対する保険であれば、普通、損失を補償する補償約款と呼ばれます。被告要求の説示9番—

裁判長： 9番ですか？

ヘイグッド代理人： この議論を始めたときに議論してきたものの1つです。  
あまりに長くなって、陪審員を混乱させることを避けるために文言を簡単にしました。

裁判長： ええ、でも—

ヘイグッド代理人： 私たちは、賠償責任に対する補償について、損失に対する補償と解釈される等、議論してきました。私は、陪審がひどく混乱することを恐れます。

裁判長： ええ、原告要求説示案の9番について続けさせてください。私は原



告要求説示案の9番は説示しないことにします。

ヘイグッド代理人： どこがいけないか、ヒントをいただけますか？

裁判長： もう一度お願いします。

ヘイグッド代理人： どこがいけないか、ヒントをいただけますか？

裁判長： 私の意見です。最初の部分から「被害者に実際に弁済していないとしても」まではいいのですが、その他の部分は賛成できません。ですから、私が別の説示を準備します。双方から異議が出るでしょうね。

さて、10番と11番、原告要求説示案の10番と11番についてですが、どちらについても賛成しかねる唯一の点は、利息の起算時です。私の説示では、利息は極東建設サービス社に対する判決が確定した日を利息の起算日とします。

ヘイグッド代理人： 裁判長、極東建設サービス社の支払義務は、判決が出されたときに定まっています。判決の確定は判決が出されたときに遡って関連します。言い換えれば、原告によって控訴があり、それは失敗したのですが、控訴審裁判所は支持して—

裁判長： ええ、でも—

ヘイグッド代理人： 下級審裁判所の判決の妥当性によって、下級審裁判所の判決はゆるぎないものとなっています。ですから、それは、言渡しがなされた1964年7月20日に確かなものとなっているのです。

裁判長： しかし約款は、判決が確定した後に弁済された義務については言及していないのでしょうか？

ヘイグッド代理人： 裁判長、それは被保険者が法的に支払義務があるとされた総額の支払義務であって、被保険者は法的に支払義務があるとされる元金だけでなく、7月20日からの利息も支払義務があるのです。

裁判長： 判決の確定については約款にいくつか言及があると思います。それはどこだったか思い出せますか？

ヘイグッド代理人： それはノーアクション条項です。ノーアクション条項が裏のページにあると思います。14だと思っています。より正確に言えば、明らかなことに、これら2つのことには、当事者は言及していませんでした。なぜなら裁判長は、契約合意XI（11）に言及した権利非放棄合意についてこの点の相違を思い出されるでしょう。これらの2つにはXI（11）ではなくXII（12）があります。

裁判長： 今は、判決の確定に関する条項のことを考えています。



ヘイグッド代理人： 別の約款をいただけますか？

裁判長： 証拠Cですか？

ヘイグッド代理人： （読み上げて）「被保険者の支払義務総額が、被保険者に対する裁判の判決もしくは被保険者の書面による合意によって最終的に決定されるまでは、いかなる訴訟も成立しない」。

裁判長： 分かりました。

ヘイグッド代理人： さて、「最終的に決定された」は「確定判決」を意味するものではありません。

裁判長： そうですか。

ヘイグッド代理人： そこにはこうあります。「被保険者の支払義務の総額が最終的に決定されるまで、保険会社に対するいかなる訴訟も成立しない」。しかし裁判長、ここでは支払総額は明記されています。「法に基づく民事責任によって被保険者に支払義務があるとされる総額を被保険者に補償する」。被保険者は、判決の日から、判決によって法的に利息の支払義務があります。

裁判長： その点については納得しました。被告からはコメントがありますか？

マクレラン代理人： いえ、ありません。

裁判長： 結構です。

マクレラン代理人： ただし、一点だけコメントしたい点があります。

裁判長： 何ですか？

マクレラン代理人： 特定の金額の評決を出す際の説示についてです。金額の判断は事実問題であり、10と11はどちらにも「6万ドルについて原告に有利に判断することができる」と一

裁判長： いえ、裁判所としては、判決が現に言い渡されていることは裁判所に顕著な事実として認めており、このケースで原告に有利な判決があったのであれば、総額は6万5千ドルかゼロでしょう。その他の金額が可能かどうかは分かりません。

ヘイグッド代理人： それは約定額です—

裁判長： 他の金額が可能なのかは分かりません。それは裁判所が決めることではありません。

マクレラン代理人： 一点ですが、総額6万5千ドルにはならないでしょう。6万ドルで、追加の5千ドルはないと思います。要するに、別々の2つの

判決が言い渡されているのです。

ヘイグッド代理人： マクレラン代理人、ご覧いただければ分かるように、これは内訳ですよ。

マクレラン代理人： もし裁判長が陪審に説示しないのであれば、陪審が損害額を判断する義務があります。さもないと、事実問題を陪審から奪うことになります。

裁判長： そうは思いませんね。なぜなら、裁判所はその点を、すでに、あるいはこれから、裁判所に顕著な事実として認めていますから、事実問題ではないからです。事実問題はあります。そして損害額については、被告要求の特別評決の3番目の質問でカバーされています。

マクレラン代理人： 私はまだ何の要求も—

裁判長： むしろ原告でしょう。取り上げてみましょう。原告の要求の11番はこう言っています。「もしこれら3つの質問に対する陪審の回答がすべてイエスなら、原告のために5千ドルの評決を法廷に持ち帰ってください」。ですから私は、原告要求の説示案10、11を説示に取り入れることにします。さて、説示に入れようと決めていたのは9番だけでした。そしてもちろん、裁判所は、賠償責任、補償、補償する、の定義を補充しなければなりません。原告はこれでいいですね。もちろん特別評決の質問事項についてです。

ヘイグッド代理人： 裁判長、原告が要求した説示案9番の代わりに別の説示案を提案してもよろしいですか？

裁判長： もちろんどうぞ。でも時間を掛けたくはありません。できるだけ速やかをお願いします。さて、双方とも長い最終弁論をなさるのでしょうか。時間を制限するつもりはありません。私が考えているのは、陪審への説示にかかる大まかな時間です。双方には説示案を補充するのに十分な時間を差し上げます—

マクレラン代理人： 少々都合の悪い時間かもしれませんが、私への電話はハリマン氏からでした。ですから今は、被告は、被告側の立証のために次の証人、マサギシ・トモエ氏を尋問するために審理を再開していただきたい。

ヘイグッド代理人： それは極めて異常です。被告の立証は終わっています。原告も終わりました。陪審は—

マクレラン代理人： 申立てを続けさせてください。

裁判長： これらの説示を仕上げさせてください。

マクレラン代理人： 裁判長は時間の問題を尋ねました。ですから私は何とか

しようとしたのです。時間の問題の一部として考慮できるはずです。

裁判長： 説示の問題を終わらせたいのです。

マクレラン代理人： たいへん結構です。しかしその関係で、証明に関する提案があります。

裁判長： もちろんです。後で証明に関する提案をしてください。さて、被告提案の説示案ですが、６つくらいの例外を除いて、これらすべてを含んでいるようですね。ここでお話しする事項は、裁判所の説示案には採用されないものです。それらをこれから見ていきましょう。

マクレラン代理人： すでにメモを持っています。もしよろしければ、裁判長。

裁判長： なにを持っているのですって？

マクレラン代理人： 裁判長が採用しなかったもの、また原告代理人が含めなかったもののメモを作成してあります。

裁判長： 分かりました。それらを述べますと、2.03、2.16、2.17、7.02、9.06、そして9.10です。これでいいですね？

マクレラン代理人： 結構です。

裁判長： 結構。さて、それでは一つずつ検討して、できれば決定していきましょう。まず—

マクレラン代理人： はい。2.03についてはすでに解決済みです。

裁判長： 解決しました？

マクレラン代理人： 裁判所に顕著な事実に関するものです。裁判長はコメントするつもりだと仰っていました。

裁判長： そうでした。

マクレラン代理人： ですから、もし裁判長が裁判所に顕著な事実その他として本当に認めるのであれば、パラグラフ２は適用できないというのが私の意見になります。

裁判長： 認めますよ。

マクレラン代理人： そして2.04についてですが—

裁判長： 今検討しましょう。被告の要求の６番でしたね。パラグラフ２を削除する。何か異議がありますか？

マクレラン代理人： 裁判長が本当に裁判所に顕著な事実などとして認めないのであれば、異議はありません。そうすると、そのパラグラフは説示に盛り込まれることになります。

裁判長： 私は認めますよ。

マクレラン代理人： それではこの点は解決です。

裁判長： 次は2.16—

マクレラン代理人： すみません、裁判長、2.04にはその他にもあると思いますが。

裁判長： 2.04ですか？ そうです、全部を取り上げていませんでした。今検討しましょう。

マクレラン代理人： 裁判長は明らかに最初の2つのパラグラフを取り上げませんでした。

ヘイグッド代理人： 私は、最初の2つのパラグラフは説示に入れられるべきだと思います。

裁判長： 双方ともこの2つのパラグラフを要求するのですね？

ヘイグッド代理人： はい、裁判長。

マクレラン代理人： はい。

ヘイグッド代理人： 推認と推定について、これらのパラグラフは説示に含まれるべきだと思います。

裁判長： それはありませんでしたが、もし望むのであれば、入れましょう。

マクレラン代理人： そのすぐ前の2.03、推認についてですが、2.04の最初のパラグラフが適用できることは明らかですね。

裁判長： あなたは—

マクレラン代理人： 推定については、まだ十分議論していないと思います。しかし、それを修正したいと思います。

裁判長： 第3パラグラフは「推定する」という文言を使っています。したがっておそらく、全体を説示するのがよいでしょう。

ヘイグッド代理人： 推定無罪（presumptions of innocence）がよく使われます。

マクレラン代理人： そうですね。

裁判長： 分かりました。2.04を全部説示とした場合、他に異議はありますか？

マクレラン代理人： 全部説示していただくことがよいと思います。

ヘイグッド代理人： 2.04の全体を説示することを望みます。

裁判長： では明日、そうしましょう。

マクレラン代理人： では次は2.16ですね。

速記官： 裁判長、テープを補充するために少しお時間をいただけますか？

裁判長： いいですよ。（少し時間をおいて）ヘイグッド代理人が要求の一部を採用するように提案していましたね。では、次は2.16ですか？

マクレラン代理人： あるいはご異議があるのであれば2.17、どちらでも。

裁判長： えーと、証人はそれほどいませんでしたが、もしお望みなら、その説示も入れましょう。さて2.17ですが、適切ではなさそうですね。証人は1人もいませんでしたね。

マクレラン代理人： 被告の証人が1人いました、裁判長。

裁判長： たった1人？

マクレラン代理人： ハリマンさんです。

速記官： それとベラミーさん。

裁判長： そうでした。もう1人いましたね。

マクレラン代理人： 失礼しました、裁判長。忘れていました。2.17の要求は撤回します。

裁判長： 結構。撤回されました。

マクレラン代理人： では2.16ですが、これがメインとして与えられるべきと考えます。なぜなら、陪審員の中には、陪審制度に関する教育や任務を果たす過程で、この点をよく知らない人がたくさんいるからです。陪審員たちは証人の数について助言を受けるべきです。つまりどちらがより多くの証人を出したかは勝敗の問題ではないということについて。

裁判長： 分かりました。要求の9番は認めましょう。そうすると2.16と2.17が済んだことになります。次は7.02ですね？

マクレラン代理人： それから3.03もあります、裁判長。

裁判長： 3.03ですか—

マクレラン代理人： 3.03については、裁判所の説示案の9 Aにあります。ちょっと疑問もありますが、そのこと自体に異議を申し立てるつもりはありません。—しかし、証人の弾劾や信用性を低下させることがあったとは思いません。

裁判長： 私が思い出す唯一の弾劾は、チョウヘイ・トミシロ氏ですね。彼は元の裁判での証言と反対のことを証言したと思われるのですよね。

マクレラン代理人： そうです。どちらの裁判でも、彼は前の証言と異なる証言をしました。ですから—

裁判長： 彼はただ、「ああ、私は逆のことを言っていますね」とでも言った印象ですね。でもどっちが正しいか、ほかの証人が話したことは思い出せ

ないですね。私が何を言いたいのか、分かりますか？

マクレラン代理人： では結構です。私の問題は自分で対処します。

裁判長： では3.03はいいですか？

マクレラン代理人： 結構です。

裁判長： よろしい。次は7.02でしょうか。

ヘイグッド代理人： しばらくお待ちください。

(ヘイグッド代理人は法廷に入ってきた者とひそひそ話で短く協議した。)

マクレラン代理人： 裁判長、この点はすでに議論しました、思い出せるのであれば。

裁判長： そうですね、これは—

ヘイグッド代理人： 裁判長、7.02は本件には適用できません。なぜなら、見出し700番シリーズの一般見出しで、それは人身傷害の損害についてです。

本件は、定額の約定額の支払を求める契約と判決に関する訴訟だからです。

マクレラン代理人： 7.02の要求は撤回します。

ヘイグッド代理人： 撤回するのですか？

裁判長： 結構。その点記録しておきましょう。

マクレラン代理人： 次は9.06です。

裁判長： そう、9.06ですね。

ヘイグッド代理人： これも適用できないと考えます、裁判長。なぜなら、本件に関する限り、この訴訟の土台をなしている判決は、ツルコ・ロバーズと息子のドニーが共同権利者だからです。

裁判長： 言い換えると、もしツルコ・N・ロバーズが賠償を受ける権限があるとするならば、その事実自体によって—。ちょっと待ってください。もし彼女が第1の請求原因で賠償を受ける権限があるとするならば、その事実自体によって、彼女は第2の請求原因によって賠償を受ける権利があることになるのですか？

ヘイグッド代理人： いえ、そうではありません。原告が2人いても、共同原告ですから—

裁判長： ええ。

ヘイグッド代理人： 1人が権利を持っているとしてもその事実だけから導かれるものではありません、その事実だけから、もし1人が権利があるとする—

裁判長： ええ、分かりました。

ヘイグッド代理人： 各自が賠償を受ける権限があるのです、それが本件です。

裁判長： おっしゃることは分かりました。

ヘイグッド代理人： 本件では、判決は2人の原告に有利に出ています。金額についての割り振りはありません。

裁判長： ええ。

ヘイグッド代理人： もし判決が2人共同して有利に出ているのであれば、各自が賠償を受ける権限があるのでは—

裁判長： （差し挟んで）代理人はそれでいいのですか？

マクレラン代理人： よく分かりました。ただ、本件では2人を相手にしていますが、1人はもう1人の保護者として、そして—

ヘイグッド代理人： この裁判も、共同訴訟を考えています。

裁判長： 代理人—

ヘイグッド代理人： 第1請求原因に基づいて6万ドル、第2請求原因に基づいて5千ドルの原告に有利な判決による救済を求めて—

裁判長： 前訴の判決は2人の原告に有利なものだったのですよね？

ヘイグッド代理人： そのとおりです。

裁判長： 両原告に有利なものだった。

マクレラン代理人： 結構です。被告はその説示の要求を撤回します。

裁判長： 結構—

ヘイグッド代理人： 分けていただけたらと思います。なぜなら、もし勝訴するとなると、私の仕事がとても複雑になるからです。

裁判長： いいでしょう。速記官、お分かりですか？ 被告の16番の要求は撤回されました。それでは9.10に行きましょう。

マクレラン代理人： 裁判長、9.10は撤回されました。私は、その要求に「もし適用できるなら」と注記してあります。9.10は一般評決用です。9.11は一般評決と特別評決どちらにも適用されます。本件では一般評決、特別評決どちらもありますので、9.10はちょっとだけですが、9.11は適用されます。ですから、もちろん9.10は撤回します。

裁判長： 9.10を撤回するのですか？

マクレラン代理人： ええ、裁判長が特別評決を許可したので、9.10は適用されないからです。9.10は一般評決にだけ適用されますから。

裁判長： よろしい。提案を上げましょう。次はその他について。被告提案



の説示案23番には賛同できません。ですから、これは却下します。

マクレラン代理人： 裁判長、要求説示案の23番を維持するために、いくつか出典を示さねばなりません。要求説示案23番の最初のパラグラフの定義は、Black's Law Dictionary 第4版から直接引用しました。説示のその余は3つのケースの判決から引用しました。まずFrye v. Bath Gas and Electric Company、これは97 Maine 241と54 Atlantic 395に収録されています。次がFinley v. U.S. Casualty Company、これは113 Tennessee 592、83 Southwest 2、そしてBurke v. London Guaranty and Accident Company、93 New York Supplement 652です。

裁判長： 被告要求の説示案23番は却下します。原告から提出された3つの特別評決の質問を提案します。3つの特別質問—陪審に提示することを提案します。

ヘイグッド代理人： 裁判長、明日、法廷外ヒアリングのため少し早く集まりますか？

裁判長： ええ。

ヘイグッド代理人： 裁判長、被告代理人、それと私で、原告要求の説示案9番の代わりに裁判長が準備されている説示案について議論したいのです。

裁判長： ええ、その点は本件では極めて重要です。

ヘイグッド代理人： この点は争点の核心に関わるものと思います。

裁判長： 結構です。

マクレラン代理人： 弁論再開の申立てについて、意見を聴いていただけますか？

裁判長： 代理人、今やっている問題をまず私に整理し直させてください。それからもちろん意見を述べていただいて結構です。ヘイグッド代理人、この問題を引き受けていただけますか、そして出典が分かるように明日準備していただけますか？

ヘイグッド代理人： はい。

裁判長： すぐ戻ります。ちょっと失礼。

(裁判長は不在となり、休廷に入った。おおよそ3分。)

裁判長： では、マクレラン代理人、どうぞ。

マクレラン代理人： 被告のために証人マサギシ・トモエ氏を尋問するために弁論の再開を申し立てます。トモエ氏は10数年 AFIA の従業員であり、彼

の宣誓の下での証言により、原告の証拠8番に示されている一般印刷条項は1960年から使われており、それ以前には、AFIA社を通じて発行されていた自動車約款には、証拠A、B、Cから分かるように、「保険者を補償する」条項が含まれていたことを証言します。彼は、さらに、1960年2月以前に発行されていた証拠8番が示すように、いかなる約款にも賠償責任文言は含まれていないことを証言します。

裁判長： ヘイグッド代理人、何かありますか？

ヘイグッド代理人： はい、裁判長。被告側は被告の立証を終えており、次の段階に進んでいます。被告は法廷でやるべきことはやったのです。もし被告がいうように、彼が本当に10年会社のために働いてきたのであれば、被告は、この証人の尋問を請求する十分な機会がありました。AFIAのマネージャーのハリマン氏は本件を詳細にフォローしてきましたから、被告側はこの証人について、ずっと前から利用できたはずですが、この証人は新たに発見されたとは言えません。この証人は被告にとって常に利用可能だったのです。私は、これを認めることは、訴訟の進行にとって不当な遅延をもたらすと思います。この証人は、新たに証拠価値のある事柄を付け加えたり、あるいはすでに提出されている証拠の価値を高めたりするものとは思えません。

裁判長： 被告側は立証を終えています。すでに行われた証人尋問は、私が見る限り、常に被告が利用できたものであり、再開するには時間も遅すぎます。この証人は明らかに新たに発見された証人ではありません。なぜなら、この証人はAFIAでそんなにも長い間働いていたのであり、彼がAFIAの業務に精通していたことを被告は知っていたし、あるいは知るべきでした。にもかかわらず彼は証人として召喚されなかったのは、ただ不幸なことでした。被告は立証を終えようとしており、申立ては却下せざるを得ません。他に何かありますか？

マクレラン代理人： 裁判長、私たちは、明朝、何時に出頭すればよいですか？

裁判長： そうですね、都合のよいときで結構ですが、陪審は引き続きいない方がよいでしょうね。なぜなら、9：30を過ぎてしまうかもしれませんから。この点は極めて重要なポイントで、また私が気になっている点です。お二人とも出頭時間について言っているのですね。私はいつでも来られます。都合のよいようにしようと思いますが、何時にしようと、

陪審は不在のままで進めることを提案したい。

マクレラン代理人： 私は、これ以上、説示を提案するつもりはありません。

ヘイグッド代理人はするでしょうが。何時に来られるかについては、私よりもヘイグッド代理人の問題が大きいです。私は何時でも裁判所、ヘイグッド代理人と合意できます。それで結構です。

ヘイグッド代理人： 私は、秘書に8：30に事務所に来るように指示しました。手書きで書くよう提案しました。秘書が事務所に8：30に来て、15分程度で書けるでしょう。そして事務所から車で15分くらい掛かりますから、9時でいかがでしょうか、裁判長。

マクレラン代理人： 私も結構です。

裁判長： それで都合がよければ結構です。陪審には呼ばれるまで待つように指示しておきたいと思います。彼らは9時30分過ぎでいいでしょうね。この点は、私は重要であると思っています。重要なポイントですね。では9時に再開しましょう。そしてそのときまでには、できればはっきりさせられるよう、努力します。遅くまで引き留めて申し訳ありませんでした。

(非公開のヒアリングは1965年10月28日 5時08分に休廷した。)

(1965年10月29日金曜日午前9時45分、陪審、代理人、裁判長、その他前日陪審が退廷した際にいた法廷職員が再度参集した。)

裁判長： 陪審員の皆さん。まず、裁判所は、法技術的なことについて代理人と少々必要な議論をしています、それは、陪審が不在のところで行わなければなりません。そのあと、代理人が陪審に対して最終弁論を行います。その後、裁判長から法に関する説示を与え、皆さんが準備すべき評決フォームについて説明します。

もしこれらを本日行えば、一日の重要な部分が失われる前に、評議に移ることができるでしょう。つまり、皆さんは、そうですね、遅くとも午後1時ころには評議に入れるでしょう。その場合は、合意できなくても結構ですし、その場合は評議を明日再開しなければなりません。私としては、すべての人、つまり裁判所、代理人、そして陪審員の皆さんにとって、月曜日の朝、評議に入ることがよいのではないかと思います。そうであれば、私が代理人と、しておかなければならない協議は終わっているでしょう、つまり法的なフォームは準備でき、遅滞なく進めることができるでしょう。

したがって、私は、皆さんを月曜日の朝９時30分まで解放することがベストと信じます。今朝皆さんに裁判所に出頭していただいたご不便をお詫びいたします。でも長い目でみれば、月曜日まで皆さんを解放することの方が皆さんにとって好都合であろうと思います。したがって一皆さんを解放しますので、法廷を９時30分きっかりに始められるように、およそ９時20分か９時25分には法廷に戻ってきてください。そして以前に説示しましたように、皆さん同士で、あるいは他の誰とも、本件の裁判に関係するいかなる事柄についても会話しないうこと、また最終的に評議が始まるまで自分の意見を固めてしまわないことが、皆さんの義務であることを忘れないでください。また、本件について新聞を読むこと、ラジオで本件についてのコメントを聴くこともしないでください。

さて、本日皆さんがお帰りになる前に、法廷に残っていただき、書記官から証明書について説明を受けていただけますか。

代理人、陪審員の皆さんと書記官の書類の作業はそんなにかからないと聞いていますので、それが終わってから協議ができますね。

マクレラン代理人： 裁判長、どのくらいかかりますか。15分から20分くらいですか？

裁判長： そうですね、20分はかからないでしょう。他に何かありますか？  
では席でお待ちください。休廷します。

（陪審は、1965年11月1日月曜日に再開することとして、1965年10月29日（原文は28日＊訳者注）金曜日午前９時52分、解放された。他方、陪審不在で、非公開のヒアリングが小休憩後に再開されることとなった。）

（1965年10月29日金曜日午後（原文は午前＊訳者注）10時10分、陪審不在の非公開ヒアリングが、裁判長、双方代理人と速記官が在廷して再開された。）

裁判長： まず、原告、被告双方から提出されている要求に基づいて、裁判所は説示を変更しなければなりません。速記官が、私が許可した代理人の要求に合うようにいくつか修正した書面を作りました。そのコピーをここでお渡ししたいと思います。

さて次は、被告要求説示案の23番の一部を認めることとしました。それは23番の第１パラグラフですが、第２、第３パラグラフについては却下しなければなりません。

さて、ヘイグッド代理人が以前に追加要求説案を提出していますが、12、13、14と15です。「補償」と「補償する」については、私自身が準備した説示があります。これも修正されなければなりません。なぜなら、私が満足していないからです。しかし私が何をしようとしているかお伝えしましょう。もちろん、コメント、異議があれば、おっしゃってください。

これが私の説案ですー。お読みになっていますか？ よろしいですか？

ヘイグッド代理人： これは今いただいた書面ですか？

裁判長： いいえ、それはまだ納得していませんから。

ヘイグッド代理人： 分かりました。

裁判長： ご意見を伺いましょう。もし同意できるのであれば、タイプさせて、コピーを差し上げます。

これは裁判所の説案の15番です。さて、ここにはない文言を入れたいと思います。そうしたほうが混乱が少ないと思うので。次のようなことです：（読み上げて）「皆さんは、「補償と損害賠償」、そして「損害賠償に対する補償」、それから「損失に対する補償」という言葉が使われるのを聞いたと思います。」「補償あるいは補償するという言葉は、原告提出証拠8では用いられていません。したがってー私はここに『したがって』を加えましたーもし皆さんが被告の保険会社と極東建設サービス社との間に、ロバーズ氏の死を引き起こした自動車を含んだ自動車保険契約が有効に成立していると判断するのであれば、そして保険証券が原告提出証拠8と同じか同様だと認めたなら、「補償」あるいは「補償する」というのがどういう意味を持つのか、ということを考える必要はありません。」ーここからは印刷されたパートを読み上げます：

「被告の提出証拠A、B、とCには、「被保険者が支払うことが法的に義務づけられた、すべての金額を被保険者に補償する」と書かれています。「損失」という言葉は使われておりません。「損害賠償に対して補償する」の合意と「損失に対して補償する」の合意の違いは、前者の場合ー私自身の文言を補いますと、前者「損害賠償に対して補償する」の合意の場合ですが、補償されるべき当事者が賠償責任を負うことになれば直ちに、契約上の義務不履行の状況が発生し、請求原因が発生します。本件の場合、勝訴判決の効力によって賠償責任が発生します。後者の場合、「損失に対して補償する」の合意の場合ですが、義務者が、それは被保険者ですが、損失を被るまで、訴訟を維持しうだけの、正当な理由なく支払わない状

況はないことになります。これらは基本的に『Words and Phrases』から採用しました。「損害賠償に対して補償する」の項目に基づいています」。

ではもう一度読みましょう。

「（読み上げて）皆さんは、補償と損害賠償、そして賠償責任の補償、それから損失補償という言葉について説明を聴いたと思います。」「補償あるいは補償するという言葉は、原告提出証拠8では用いられていません。」—さてここからが挿入を提案したいパートです—ですから、もし皆さんが、被告の保険会社と極東建設サービス社の間の自動車保険契約は有効に成立しており、ロバーズ氏の死亡を引き起こした自動車をカヴァーしていると考えるのであれば、たまたもし皆さんが、当該保険契約が原告提出証拠8と同様であると考え—あるいは判断するのであれば、「補償」あるいは「補償する」という言葉について考える必要はありません」。

—さて、印刷されたコピーをもう一度読みますね。

「被告提出証拠A、B、そしてCには、「損害賠償に対して補償する」という言葉が使われています。「損失」という言葉は使われていません。「損害賠償に対して補償する」の合意と「損失に対して補償する」の合意との区別は、前者は、それは「損害賠償に対して補償する」の合意の場合ですが、補償されるべき当事者が賠償責任を負えば直ちに、契約上の義務不履行の状況が発生し、請求原因が発生します。本件では勝訴判決の効力によって賠償責任は発生しています。後者、つまり「損失に対して補償する」の場合は、義務者、つまり被保険者が損失を被るまでは、訴訟を提起できるだけの、契約上の義務不履行の状況はないことになります。—これは基本的に『Words and Phrases』の「損害賠償に対して補償する」の項目に基づいています」。

いくつかの要求のあった説示、原告の追加要求説示は、許可することを決定しましたが、より分かりやすくしてくれると信じます。被告代理人はその追加要求説示のコピーをお持ちですか？

マクレラン代理人： はい。もっています。

裁判長： 結構です。今裁判所が差し上げた説示案に基づき、裁判所は、実際上、どんな約款が関係するかにかかわらず、「補償」、あるいは「補償すること」についての契約はなかったと判断したことになります。私の言うことは分かりますか？

ヘイグッド代理人： はい。私が説示案15に加えたことです。



裁判長： では、そういうことでしたら、実際、「補償すること」についての保険約款はなかったと陪審員に説示するつもりですので、ご提案の第1段落目は、使わないようすべきだと考えます。

ヘイグッド代理人： 裁判長。私もそのように考えましたが、実際の保険証書2215番は、法廷に提出されていません。これまで法廷に提出された唯一のものは、この失われた保険証書そのものと似ている可能性があると言われている別の保険証書にすぎません。まだ、陪審員が、この2215番は、他の4つの保険証書とは異なるものであったと認定する可能性があります。

裁判長： そうですね。

ヘイグッド代理人： 証拠としてすでに提出された保険証書類。そのため、この問いを陪審員の判断に残したのです。

裁判長： 分かりました。

ヘイグッド代理人： そして、そのため、希望説示の15番は、指示評決の要求というだけではないのです。

裁判長： 私はただ—

ヘイグッド代理人： （割り込んで）これまで裁判所に提出され、取調べられた保険証書は、賠償責任保険約款として知られているものと解釈されるものでした。

裁判長： 裁判所もそのように考えています。だから、説示案の12番の第1段落は説明するつもりですし、第2段落もそうです。第3段落は、「同様の効果」で始まる1文以外は説明するつもりです。この文の説明は断わらざるをえません。

さて、13番ですが、14番と15番に移らせてください。14番と15番も許可しようと考えています。ところで、被告代理人は、何かご意見ありますか？

マクレラン代理人： はい。裁判長。原告から提案された12、13、14、15番の説示については異議があります。また、私たちとしては、裁判所ご提案の説示についても1点異議を申し上げたいところがあります。それは、裁判所が、この証書を誤って引用している点です。裁判所は、「責任に対して補償する」とおっしゃいましたが、この証書は、「責任に対して被保険者に補償する」と書いています。引用として、括弧に括られてこの言葉が示されるなら、この証書を誤って引用するのは不適切だと考えます。

裁判長： わざと誤って引用したのではありません。私にとって、重要なのは、



「被保険者」という言葉ではなく、「損失」という言葉ではなく「責任」という言葉を使っているかどうか、意味があると考えます。

マクレラン代理人： ええ、裁判長—

裁判長： では、裁判所は—

マクレラン代理人： 裁判長。私にとって、より意味があるのは、この契約書が締結されたときの、両当事者の意思です。当事者が何を目的としていたかです。このことが、他の諸争点に優先する1番重要なことです。

裁判長： 分かりました。

マクレラン代理人： これは、陪審が必ず決めなければならないことです。そのため既に述べたこと以外、特に異議はありませんが—保険約款の当事者は約束の用語について合意し、したがって約款は、当事者の合意当時の意思を反映しているということが最も重要であるということから説示は始められるべきです。

裁判長： え—と。

マクレラン代理人： 繰り返しになりますが、原告代理人が指摘するように、法廷に問題の証書の原本は提出されていませんし、陪審に示された証拠は、この法廷にいない、日本のある会社によって保険証書は販売されたということ、またこれを極東建設サービス社のために購入した人物であるピーターソン氏は死んでしまって証言できないことです。そのため、陪審というよりも裁判所が、この契約を結んだときに、当事者がどのような意思をもっていたかについて判断をしなければならないのです。

裁判長： 意思が重要なことは認めます。

マクレラン代理人： 裁判所が論じている問題や、原告代理人が要望として論じていることは、陪審に対しては、これらの問題は、保険契約を締結した時に当事者がどのような意思であったかを決定する際にだけ考慮されるものであるという助言がなされるべきだと思います。

裁判長： はい。ええと—

ヘイグッド代理人： 裁判長、その点は、原告提案の説示の12番の第2段落でカバーしています。つまり、「一般的に、ある特定の証書の対象に該当する者の範囲は、その証書に関する合意の用語によって証明される契約者の意思に基づくものとする。」また、裁判長、原告提案の説示12番の第2、第3段落は、『アメリカン・ジュリスプラデンス』の一語として違わない直接引用であることを付け加えておきます。第1段落は、本法廷で問題

になっているものに合わせるために、私の方で編集しています。

裁判長： はい。おっしゃる通りだと思います。引用だということが分かれば十分です。

ヘイグッド代理人： 確認なさりたければ、原文をご覧に入れます。これが第2段落です。

裁判長： これは『アメリカン・ジュリスブルーデンス』の29A。

ヘイグッド代理人： ページは—

裁判長： 458ページ。

ヘイグッド代理人： いえ459ページと460ページです。

裁判長： 459と460ページですね。

ヘイグッド代理人： これが、提案した説示の12番の第2段落です。赤い括弧で囲まれた部分は、秘書に書き写させるために、私がつけたものです。第3段落は、460ページにあります。おなじく、括弧で囲まれた部分です。

裁判長： はい。このセクション1343ですね。このセクションに、「一般的に、ある特定の証書の対象に該当する者の範囲は、その証書に関する合意の用語によって証明される契約者の意思に基づくものとする。」とあります。

これについて代理人からご意見はありますか？

マクレラン代理人： いいえ。ただ意見を言わせていただければ、もし裁判所が、この説示をどこかでしようと考えておられるなら、裁判書の説示の冒頭あたりに、その主旨の説明を置くべきだと思います。

裁判長： 「一般的に、ある特定の証書の対象に該当する者の範囲は」ですか？

マクレラン代理人： その通りです。あらゆる契約の成立は、両当事者の意思によって成立するということを陪審は最初に知らされるべきだと思いますので、私は、この部分の引用は、最初にいれるべきだと思います。

裁判長： 承知しました。私の提案した「皆さんは「補償」と「賠償責任」という言葉をお聞きになりました。」から始まる説示についてはいかがですか？ その説示の前に、先ほどの文、「一般的に、ある特定の証書の対象に該当する者の範囲は、その証書に関する合意の用語によって証明される契約者の意思に基づくものとする。」というのを入れたいと思います。代理人はそれでよろしいでしょうか？

マクレラン代理人： 十分です。

裁判長： 結構です。

ヘイグッド代理人： 裁判長、『アメリカン・ジュリスブルーデンス』がお手

許にあると思いますが、原告提案の説示の12番の最後の文についてです—

裁判長： はい。この中にあるかもしれません。その点について議論するつもりはありません。

ヘイグッド代理人： これは単に先ほどの段落の続きです。

裁判長： しかし、私は、それを勧められないと思い、その文章を説示に入れることは拒否しなければなりません。さて、私に関心あるのはパラグラフ13ですが—

ヘイグッド代理人： 裁判長、私は、この点に関する当事者の意思は、法の公正な説明と思います。当事者の意思は、契約は、同一状況で履行されたという方法でしばしば見出されます。もし、実際の損失が発生し、被保険者が支払うまで保険者は責任を負わないという厳格な補償保険という意味で被保険者を補償するということであるならば、保険者による支払いは必ずしも原告もしくは被害当事者に対してではなく、被保険者に必ず支払われることになります。しかし実際には、契約上の被保険者ではなく被害当事者に直接支払われています。先ほどの厳格な理解では、当事者は、被保険者を補償するというよりは、被保険者のために支払うという意思を有していたようにみえてしまいます。

裁判長： それに対する唯一の問題は、ハリマン氏の証言です。その証言は、そのような支払は、事実上の便宜か、あるいは、彼が述べるように、それはサービスであるというのが、彼が言いたい趣旨のようでした。

ヘイグッド代理人： 裁判長、それは陪審が判断すべき事実問題と思いますが、いかがでしょうか。ハリマン氏の証言では、彼の知る限り、支払いは、常に直接被害当事者になされるのが不変の実務であるとのこと。そして、彼の知る限り、保険者は、被保険者に支払いすることなく被害当事者に直接支払っていること。例外は、被保険者が、実際に自ら支払った場合で、その場合、保険者は、保険約款に従って被保険者に支払うが、主として、支払は被害当事者になされるということを述べたと思います。私は、本件では、当事者の意図を判断することで、それは陪審が判断すべき事実問題と思います。それは陪審不在の状態で判断すべき法的問題ではありません。陪審は、ハリマン氏の証言を聴きました。陪審は、彼の証言を信用するかどうかの権限を有しています。

マクレラン代理人： ある契約あるいは同様の契約の履行方法は、本件とは何

ら関係なく、また、契約締結時における当事者の意図とも関係ないというのが、私の基本的な契約法の考え方です。ここには、明確に別に考えるべき必要があります。契約締結時の時の意図と、他の契約の履行方法とはまったく別の事柄です。私は、そのような理由で、原告が要求する第13番目の説示を陪審に述べることは不適切と思います。何故なら、他の事件における契約履行方法、同一契約であるかどうか、同一文言が用いられているかどうかは、本件の判断を左右するものではなく、無関係だからです。

裁判長： 13番目の説示は削除します。

ヘイグッド代理人： 裁判長、その判断をする前に、もう一度私の意見をお聞きください。

裁判長： 分かりました。

ヘイグッド代理人： マクレラン代理人が指摘した点は、契約の一般論として当てはまるでしょう。しかし、ここで扱うのは、自動車事故の賠償責任保険契約で、それは、非常に標準化されたタイプの契約、保険です。それは、大衆一般に大量販売されているもので、いわば必需商品といってよいでしょう。このような標準化された契約の履行方法、達成方法は、問題となっている特定の契約に入る前に、当事者の意思に大きな影響を与えるでしょう。

本件で、ホールさんの証言を思い起こしましょう。彼は、彼の会社は賠償責任保険に加入していると思うと証言しました。この問題は、本件訴訟まで問題とされませんでした。さらに、彼は、彼が保険会社に支払いを特に求めなかった理由は、「自動的に支払われる」こと、つまり、損害が確定されたり、判決がなされたりしたときに支払われると証言しました。

裁判長： たしかにそうです。覚えています。

ヘイグッド代理人： 本件で、AFIAは、沖縄あるいは極東で保険業を営んでいました。いや、ホーム保険会社と呼ぶべきでしょうか、本件で唯一残された被告で、この2215という保険を販売する前の永い間、沖縄近辺で保険を販売してきました。そして、被保険会社であるFECONは、この保険に加入する1959年4月あるいは5月以前から業務を行っており、自動車を運転し、疑いもなく、いくつかの自動車損害賠償保険をかけていました。この契約に入る前に、請求が扱われる方法は、当事者の意思に一定関係するようです。つまり、保険会社は、実際、被害当事者に、あるいは請求者に直接支払ったのかどうか、そして被保険者が実際に支払するまで待たなか

ったのかどうか、これは、FECON、あるいは、保険をFECONのために購入したピーターソンの意識の中にあったはずです。これが、彼らがこのタイプの保険の下で、将来することでしょう。

裁判長： この問題を解決するために、私は申立てを却下します。しかし、あなたに調査することを認めます、あなたには、そのための時間を与えます。

ヘイグッド代理人： 分かりました。

裁判長： あなたが、あなたの主張を裏付ける新たな法的根拠を示すことができれば、意見を変えることを躊躇しません。いかがでしょうか。

ヘイグッド代理人： 分かりました。

裁判長： そのために時間を与えます。

ヘイグッド代理人： ありがとうございます、裁判長。週末に努力します。

裁判長： たっぷり時間があるはずですよ。

マクレラン代理人： この関係で、私は指摘したいと思います。代理人の議論は、彼女には当てはまらないと思います。何故なら、2215の購入日以前の請求支払いに関する実務は参考的なものであり、その点に関する証言はありません。請求に対する支払方法に関して、法廷に現れた唯一の証拠はハリマン氏の証言ですが、彼は、その時沖縄にいませんでした。そこで、記録上、問題となっている法律上の問題が認められる証拠はありません。それ故、ハリマン氏は、遅れて到着しましたが、そのハリマン氏が沖縄に来た後—それはずっと後のことです—なされたことは事実の問題になります。そして、私たちは、少なくとも、2つの異なった種類の保険証券があることを知っています。それらは条文数が異なっています。そして、ピーターソン氏が推測の根拠としていた1959年以前の会社の実務に関して、証拠があるのかどうか、その推測がどのようなものであれ、あるいは、私たちは、どのような推測であるのかわかっていたとしても、それは、本質的なものとなりましょう。しかし、現在においては、保険会社の実務に関して約款規定の成立という事実の後に生じたことは本質的なことではありません。

裁判長： 私は、当事者の意思を契約が履行された方法によって示すことは許可しないつもりですが、もし説得されるのであればその反対論に傾きたいとも考えているので、必要な調査をする時間を与えます。さて—

ヘイグッド代理人： それでは、原告の求める説示13は却下されたということですか。

裁判長： え？

ヘイグッド代理人： 却下ですか。

裁判長： そうですが、しかし、私の意見は、もし、その反対の根拠が示されれば変更する予定です。

ヘイグッド代理人： 分かりました。

裁判長： さて、皆さんは、補償、責任、賠償責任や損失にたいする補償に関する私自身の定義に同意されたようです。それを文章にして提示しますが、これをマクレラン代理人に提示します。「一般的に、ある特定の証書の対象に該当する者の範囲は、その証書に関する合意の用語によって証明される契約者の意思に基づくものとする。」もちろん私たちは、正式文書以外の証拠が書面契約の文言を変えるために提出されたときは、parole evidence rule<sup>5</sup>によることになります。その問題が生じるかもしれないし、明白なあるいは潜在的な不明確が生じるかもしれないが、あなたは、以前述べたように、この文章に同意されますね。

マクレラン代理人： はい、一般論として。私は、この引用文に同意します。何故なら、それは、いかなる契約の解釈にも当てはまると考えているからです。

裁判長： さて、別のことですが・・・

マクレラン代理人： 当事者の意図ですねー

裁判長： 別のこととは次のことです。私は、「被告の証拠A、B及びCには、『賠償責任に対する補償』という文言が使用されている」と述べます。さて、マクレラン代理人、あなたは、「被保険者を補償する」、あるいは「被保険者」、「賠償責任に対して」の文言を使用しています。

マクレラン代理人： これらの条項を検討されれば、これらの文言がよいと思われると。

裁判長： では、あなたの言葉を用いましょう。

マクレラン代理人： 結構です。

裁判長： さて、ほかに何かありますか。これらの文章は、順序立てられていません。これらを整えたいと思います。そして、これら裁判所の説示をタイプします。次に検討すべきは、評決フォームです。私は、原告が求めて

---

5 訳者注 parole evidence rule: 正式文書で書面化された合意内容と異なることを他の口頭・文書証拠で証明することを許さないとする準則（英米法辞典623頁）。



いる質問事項で問題ないと思います。それに沿いましょう。それらをタイプすることも問題なく、一枚に収まるでしょう。評決様式もできましたが、それはこんなものです。

マクレラン代理人： 裁判長、私は、評決様式は、陪審説示の裏側に印刷されるとよいと思います。

裁判長： すみません。文献をとってきます。

マクレラン代理人： （裁判長が法廷に戻った後）頁は558頁あるいは559頁です。一般評決と特別評決の部分ですが、そこに様式が記載されています、裁判長。

裁判長： 特別評決というのは、質問書のことを言っているのですね。

マクレラン代理人： はい。

裁判長： では、それでいいですね。それで、一般的評決に関しての問題は以下のとおりです。16.20で行くと、原告を勝訴とし被告を敗訴に判断する、で十分だと思いますか？

マクレラン代理人： そのとおりです。これらはたいへんに簡単なフォームになっています。ロバーズ対極東建設サービス社の裁判で、もし裁判長が他のフォームを知りたいのであれば、記録の中にたいへん簡単なフォームの評決があって、これらのフォームが後から出てくると思います。

裁判長： いや、これらのフォームはそれらに基づいています。

マクレラン代理人： それらもこの同じパターンの単純なフォームをとっていますが。

裁判長： ですから、16.20でいくと、こうなります。「私たち陪審は—これが適用される場合ですが—原告を勝訴とし、被告を敗訴に、判断します。」というわけですが、これでいいですか？

マクレラン代理人： それでいいです。

ヘイグッド代理人： 裁判長、私は、請求原因１と請求原因２とに分けるべきだと思います。なぜなら、訴状に２つの請求原因があるからです。実際、それらは別々の請求原因です。こういうふうに書いてはどうでしょうか。「私たち陪審は—概ね説示16.20の言葉を使って—私たち陪審は、上に述べられた訴訟において、請求原因１について、原告を勝訴とし被告を敗訴と判断します。」原告の後の空欄にツルコ・Ｎ・ロバーズを、被告の後の空欄にホーム保険会社を入れて、そして損害賠償金額の合計額を入れて、ここで利息を、陪審のために計算しなくてはならないと思います。



裁判長： 6万ドルに利息を足したものと書けば、十分だと思います。とにかく、私は数学が得意ではないので。

マクレラン代理人： 特別評決用紙に、そう書くのですね？

ヘイグッド代理人： 「1964年7月20日からの利息を加える。」と書けばよいです。

裁判長： 「利息を加えて」とすれば、われわれが計算しなくてよいと思います。

ヘイグッド代理人： それで、2つ目の一般評決は「われわれ陪審は、上記の事件で一」。やっぱり、用紙は別々にすべきです。請求原因ごとに別の用紙にすべきです。2つ別々であるべきです。

マクレラン代理人： 3つの別々の評決であるべきですー。3つの別々の一般評決です。請求原因1について被告のために1つ、請求原因2も被告のために1つ、そして2つの請求原因について原告のために1つ必要だと思います。

ヘイグッド代理人： いや、4つ必要です。第3の質問に肯定的に答えられない場合、請求原因1について原告勝訴として、請求原因2について原告敗訴とすることがあります。

マクレラン代理人： そうですね。そうすると4つの一般評決が必要ですね。

裁判長： はっきりさせましょう。言いかえると、極東建設サービス社に責任があって、トミシロ氏に責任がないという可能性を考えているというわけですか？

ヘイグッド代理人： いや、そういう問題ではありません。

裁判長： では何の？

ヘイグッド代理人： つぎのような可能性があります。もしトミシロ氏が被保険者に含まれると判断したら、請求原因2について、5千ドルという金額について、陪審は原告勝訴とすべきであると説示されるべきです。第3の質問は、チョウヘイ・トミシロ氏は保険約款の11項にいう被保険者に含まれるか、です。もし第3の質問に対して、答が「はい」ならば、彼は被保険者です。もちろん、それは許容された用法かどうかによるのですがー

裁判長： うーん。

ヘイグッド代理人： もし陪審が「はい」と判断すれば、請求原因2について5千ドルの原告勝訴の評決があることになり、答えが「いいえ」であれば、被告勝訴という評決にいたったということで、それで終わりということですよ。

裁判長： 私が今、考えているのはこういうことです。もし極東建設サービス

社を被保険者とする契約があり、同社に賠償責任があるとしたら、トミシロ氏は自動的に賠償責任があるのではないですか？

マクレラン代理人： 必ずしもそうではありません。

ヘイグッド代理人： 裁判長、前の裁判では、そのように判断されませんでした。マクレラン代理人がこの点で私を支持してくれると思いますが、最初の裁判では陪審は極東建設サービス社に対して6万5千ドル、そしてトミシロ氏に対して、ゼロの評決を出しました。ところが、裁判長はもう一度考えるように、陪審を評議室に返しました。私が裁判長席での協議で、陪審に連帯責任について説示するよう口頭で要求したのですが、裁判官は明らかに拒否したのです。そして陪審は戻って来て、極東建設サービス社に6万ドル、トミシロ氏に5千ドルを割り振りました。

裁判長： しかし、私には、まったく論点がずれているように思えるのですが。

マクレラン代理人： ヘイグッド代理人は正しいと思いますが、理由は簡単に言うと以下のとおりです。ここで検討すべき2つの判断があります。つまり、6万ドルのものと、5千ドルのものですが、当事者が違います。それぞれが別の法人格です。陪審が、極東建設サービス社が組織として保険会社の被保険者になるという判断をしたとしても、トミシロ氏個人に適用される別の賠償責任を保険会社は補償しないと判断することは当然可能です。

裁判長： これはちょっと、難しい問題ですね。

マクレラン代理人： ですが、この補償範囲の問題にかかわるノーアクション条項<sup>6</sup>という証拠があるのをご記憶と思います。

裁判長： どう関わるのですか？

マクレラン代理人： なぜなら、この条項によって保険会社一両当事者は、被保険者を区分して、補償あるいは賠償責任をカバーしないと合意しているからです。

ヘイグッド代理人： ちょっと待ってください。それは間違っていますよ。それはノーアクション条項とは違います。保険会社は、その事件の調査を請け負うことで、トミシロ氏について、保険契約11条の責任はなかったとい

---

6 訳者注 no-action clause: 責任保険約款において、被保険者と被害者との間の訴訟の判決または被保険者・被害者・保険者間の和解により損害賠償額が確定した後に初めて被保険者が保険者に対する保険金請求訴訟を提起できると規定する条項（英米法辞典P.586）。

う主張をする権利を放棄するものではないと同意したのです。言い換えれば、トミシロ氏は保険契約に含まれないとの合意について、FECONが同意したということはありません。このノーアクション条項は単に、保険会社が事件の調査をすることによって彼らの主張を放棄しないということを言っているだけですが、これは拘束力はありません。なぜなら、この同意書はカービィ・ロバーズ氏の死亡した後で作られたもので、カービィ・ロバーズ氏の死亡を原因とする実質的な権利に影響しないからです。

裁判長： 間違っているかも知れませんが、私の印象では、そのノーアクション条項について、トミシロ氏は運転する許可を持っていなかったという理由で、会社は賠償責任を否定しているのだと思います。

マクレラン代理人： 裁判長、そのことを取り上げる別の文章があります。

ハイグッド代理人： （明らかに読んでいる）「保険契約第11条の下で、保険責任はないというのが当会社の主張である。」書かれてあるとおりに引用できます。

裁判長： そうですね。しかし、もう少しみると、私が知っている限りでは、私は間違っているかも知れないのですが、トミシロ氏は許可なしに車を出したのではなかったですか？

マクレラン代理人： それは—

裁判長： そこが意図された点だと思います。

マクレラン代理人： その点が、その書類に関わる主たる問題だと思います。

裁判長： そうですね。トミシロ氏に責任がないとしたら、会社にも責任がないように思います。

マクレラン代理人： 裁判長、必ずしもそうではないと思います。なぜなら、前の裁判で陪審は、会社の側の責任を認めましたが、トミシロ氏の責任は認めませんでした。

裁判長： 前の裁判に私は拘束されません。

マクレラン代理人： 2つの異なった判断があったという事実を別にして、そのこと自体その事件の1つの問題でしたし、それは2つの別の判断がなされたことによって解決されたのです。

裁判長： こういうふうに見たらどうですか。もし極東建設サービス社に賠償責任があるのなら、つまり責任を問われたら、トミシロ氏も自動的に責任があるのではないですか？

マクレラン代理人： 裁判長、それは私たちの主張とはまったく違います。極

東建設サービス社は、トミシロ氏とは別に責任を負うことが可能です。

裁判長： どうしてそうなるのですか？

ヘイグッド代理人： この点について日本の民法典を詳しく調べたのですが、裁判長、従業員によって負わされた怪我に対する雇用者の民事責任に関する日本の法律を検討すると一般の英米法における「監督責任」という概念が放棄されているようです。

裁判長： それで。

ヘイグッド代理人： それらは違ったカテゴリーに分類されています。どちらかといえば、危険な道具（笑いながら）を作動させる者の責任の理論といった感じです。

裁判長： それは民法に基づくということですね。

ヘイグッド代理人： しかしながら、前の裁判では、陪審は雇用者と従業員について、別々の評決を出し、裁判官は別々の判決として認容し、その判断は控訴裁判所でも認められました。だから、今度の場合も、彼らの知恵を疑って、これらの判断以上にも以下にもできないと思います。これらの判決を履行するのかわからないのか、という保険会社の責任の問題を明確にするために、この裁判が開かれているのです。

裁判長： そのとおりです。

ヘイグッド代理人： 最初の2つの質問が肯定的に答えられることが必要になると思います。すなわち保険契約があったこと、それが損害賠償の保険だったことです。そうすると、請求原因2に関して、この裁判の唯一の事実の問題は、トミシロ氏がその自動車を運転していたという状況によって、トミシロ氏が「被保険者」と表記された人の区分に入るのかということですね。それは法廷に提出されたすべての4つの保険証券にある約款の1つです。その4つは、少しも違わないと思います。そうではないですか、ハワード？

マクレラン代理人： そうです、違います。

ヘイグッド代理人： 4つの証券はすべて同じ表現です。「被保険者」に限定を付けています。補償範囲Aは、え〜と、ちょっとチェックしてみましょう。（明らかに、読んで）「補償範囲Aは、自動車の使用に対して法的責任を負うあらゆる個人あるいは団体を含み、実際の自動車使用は、被保険者として名前のあげられている者の許可を得ている場合」。そして、トミシロ氏の証言は、確かに、自動車を運転してはいけないと誰にも言われなか

った、というものでした。(笑いながら) 私たちが実際に示せる許可といえ、入り口の守衛という地位の低い人の許可で、手を振って出てもよいということだけでしょう。これは陪審に、会社が—そこに被保険者として書かれていたのは会社で、会社というのは代理人あるいは代表者を通してしか行為が起こせないのですが—つまり、門のところの守衛が、そのような会社の代理人あるいは代表者に当たるかを決めていただきたい、と弁論したいのです。

裁判長： よく分かりました。

ヘイグッド代理人： つまり、自動車を門から出させた彼の行為が、被保険者名義人である会社の、その自動車を運転してよいとの許可を得てのものかどうか。これは陪審に向けられた、純粹に事実の質問だと思います、裁判長。

裁判長： 分かりました。それでは4つのフォームを準備しましょう。「われわれ陪審は」、16.20の、ひとつのフォームでは、「われわれ陪審は、上記の事件につき、請求原因1について—もしそれが事実ならば—原告たちの勝訴とする。」いいですね。

ヘイグッド代理人： そうです、原告たち、と複数形です。ツルコ・ロバーズということで、細かくすることはないでしょう。細かくすることもできません。

裁判長： そうですね。それは最後に出てきます。事実がそうなったとして、ひとつの用紙には、「私たち陪審は、上記の事件につき、請求原因1に関しては、原告たちの勝訴とし、被告の敗訴とする。」としたいと思います。

ヘイグッド代理人： やはり違うのでは—このフォームには、評決における氏名のための空白の個所があります。

裁判長： 何でしたっけ。

ヘイグッド代理人： このフォーム16.20には、被告と原告の実際の氏名が入られる個所があります。

裁判長： ウーン、私はそう考えません。

ヘイグッド代理人： 実際それが必要だと思われますか？ ただ1組の原告と1人の被告しかおりません。

マクレラン代理人： 実は、実際問題として、複数の当事者があって、それらを区別する必要がある場合以外は、連邦裁判所は特定の当事者に名前をつけません。

裁判長： 分かりました。それらを名付けるのはよしでしょう。

ヘイグッド代理人： そうすると、それはただ、「原告に有利に、被告に不利とする。」ということになるでしょう。そして—

裁判長： さて、別のフォームは、事実がこのようだとすると、他のフォームは、「私たち陪審は、上記の正当な権限により、請求原因2について、原告勝訴、被告敗訴とする。」となるでしょう。

ヘイグッド代理人： その通りです。

裁判長： さて、私のはっきりさせようとしていることは、どうすれば4つのフォームになるかということです。あなた方はどうやって4通りを得たのですか？

ヘイグッド代理人： 第3のものは、「私たち陪審は、上記の正当な権限により、原告勝訴、被告敗訴とする。」—請求原因1について。そして請求原因2は別です。

裁判長： なるほど、それで請求原因2について第4のフォームは—

ヘイグッド代理人： 請求原因2は、被告勝訴、原告敗訴。

マクレラン代理人： その通りです。

裁判長： それでほとんど解決です。

ヘイグッド代理人： それが、請求原因1、請求原因2、どちらにおいても原告に有利な評決をもたらす唯一の場合であり、損害額の算定に進めます。

裁判長： それには決まったフォームがあるわけではありませんよね、何かありますか？ 私は、あなたの要求に従って、請求原因1については、6万ドルとそれが要求された日からの利息、請求原因2については、5千ドル他、としようと思うということです。よろしいですか？

ヘイグッド代理人： 結構です。

裁判長： そして、それは利息を伴います。

ヘイグッド代理人： 利率を決める必要がありますが—

裁判長： 何とおっしゃいましたか？

ヘイグッド代理人： 私は、利息の利率を例えば6%とするのがよいと言いたかったのです。

裁判長： そうですね。実際—。6%の利率に異議はありますか？

マクレラン代理人： 裁判長、私たちは、この法域に適用される利率を持ち合わせておりません。

裁判長： 問題は、私が陪審員に説示しなければならないということですね。

それは私の義務だと思います。そして、米国における利息の一般的な利率は6%です。

マクレラン代理人： 私はそれに同意します。

裁判長： 結構です。

マクレラン代理人： もし6%とするなら、異議ありません。

裁判長： 結構です。

ヘイグッド代理人： 米国におけるこの利息に対しては私に法的根拠があります。それは—

裁判長： ヘイグッドさん。彼は異議がないと言っていますよ。

ヘイグッド代理人： 了解しました。

マクレラン代理人： では、裁判所は月曜の朝より前に、さらに法廷外で検討すべきことがありますか？

裁判長： 月曜の朝より前ですか？

ヘイグッド代理人： はい、すみません、月曜の朝より前です。問題は、私が今日の午後、ある事件について第1海兵師団本部に呼び出されているということです。もしないのであれば—

裁判長： 私が月曜の朝、陪審員が来る前に3人でやりたいことは、私が却下した説示の問題について、ヘイグッド代理人が議論できるようにすることです。もしあなた方が宜しければ、8時45分頃にしたいのですが、ヘイグッド代理人如何ですか？（一呼吸おいた後）私はあなたの便宜を図りたいと思います、ご都合は如何ですか？

ヘイグッド代理人： 説示13の却下が原告の立証に重要として更に時間を取ることが正しいとは思えません。ですから、私は、説示13について、更なる理由を申し立てることはいたしません。

裁判長： それではその点は解決です。

ヘイグッド代理人： ところで、12番の第3パラグラフ、最後の文章の却下ですが、私はそれに関して裁判所が考え方を変えるように希望し、それはできませんでしたが、それについても更なる議論を申し立てるつもりはありません。

裁判長： 結構です。それでは、月曜の9時30分に再開する準備ができました。十分結構です。

（その週の非公開審理は、1965年10月29日金曜日午前11時07分、休廷となった。）



（1965年11月1日月曜日午前9時40分、裁判長によって、陪審員不在の協議のため、非公開審理が召集された。出席者は1965年10月29日の非公開審理に参加した同じ裁判長、両代理人、速記官であった。）

裁判長：　これが前回の協議情報です。第1に、私は、裁判所に顕著な事実を採用しないようにとの申立てを却下しました、したがって、その点に関する説示は必要ではなくなるでしょう。もともと私は以前の判決について裁判所に顕著な事実とするつもりでした。しかしながら、判決が出され、そして被告において、判断が確定したものであることを否認したこと以外は、認められました。私は、陪審員に、判決は認められたということ、そしてその判決は最終のものであったと説示することを提案します。その説示は6番です。その説示は再度書かれ、置き換えられました。私はここに、代理人のためにコピーしました。あなた方は私より速く読むことが出来るでしょう。先ず6番を見ていただいて、あなた方がここにいる間に、お持ちください。（代理人が書類を整理した後）6番について見ていただけませんか。第2パラグラフです。それは全て正しいですか？

マクレラン代理人：　私たちには異議ありません。

裁判長：　結構です。原告側はいかがですか？

ヘイグッド代理人：　私にはチャンスがなかったので—

裁判長：　それは説示6番のパラグラフ2です。以前の説示は、裁判所に顕著な事実について言及していましたが、必要なくなったので取り除きました。

ヘイグッド代理人：　この修正された2頁は、オリジナルの3頁に繋がるのでしょうか？

裁判長：　それは、修正された3頁に繋がります。

ヘイグッド代理人：　分かりました。修正された説示6に異議ありません。

裁判長：　さあ、それでは、次は私の説示13番です。私が埋めなければならなかった幾つかの空白があります。説示13番は見つかりましたか？　特別評決のフォームの次です。このようにして私は空白を埋めました。ご両人とも、次の部分をご覧くださいませるか。「あなたが質問の言い回しからお気づきのように、それには答える必要はありません。」との個所、そして—私がこれを入れたのですが—「質問2及び3」、「もし質問1—私が1を挿入しました—に対する陪審員の答えが「いいえ」であれば、「質問1及び2に対する陪審員の答えが共に『はい』でなければ、質問3に対しても陪

審員は答える必要がありません。」としました。

次のパラグラフ。私はここをこのように読むことにしました。

「したがって、もし質問1に対する陪審員の答えが『いいえ』であれば、陪審長は質問2及び3に答えることなく、特別評決に日付をいれて署名してください。他方、もし、」—そこにタイプした部分があるでしょう—「他方、もし質問1及び2に対する答えが両方とも『はい』であれば、陪審員は質問3に答え、そして陪審長は特別評決に日付をいれ署名してそれを完成させてください。」それでいいですか？

ヘイグッド代理人： 結構です。

裁判長： もう一度、私は私の説示15を変更しました。どうか、それを読んでどうお考えになるか、ご確認ください。それは、私が以前に述べたことに基づいています。代理人はよろしいですか？

ヘイグッド代理人： はい、異議ありません。

マクレラン代理人： 異議ありません。

裁判長： さて、質問書ですが、代理人の質問書、3番目、それはちょっと曖昧かもしれません。というのは、質問書では、当該証券に記載された「被保険者」の定義について、保険契約XI（11）条において「被保険者」と表記された人の区分の中で言及しています。さて、私は、保険約款をはっきりさせることが望ましいと思います。というのは、2つの保険証券のXI（12）条にも同じ定義があり、2つの保険証券のXI（11）条にもあるからです。そこで、もしお望みなら、どうぞ説明してください。私が言っていることを理解できますか？ 別の言い方をすれば、私は、それは原告の証拠8におけるパラグラフXI（11）と被告証拠Cに現れており、また、被告証拠A及びBにおけるパラグラフXI（12）にも現れています—ということなのです。そうしなければ陪審員は—

ヘイグッド代理人： 私は、「保険契約XI（11）もしくはXI（12）」と補正することに異議ありません。

裁判長： あなたがそのようにしたいのであれば。

ヘイグッド代理人： 被告側もよいのではありませんか？

マクレラン代理人： 異議ありません。

ヘイグッド代理人： 私が「保険契約XI（11）」と記載する唯一の理由は、当事者によって署名された非放棄約定において、保険契約XI（11）条が特別に言及されていたからです。

裁判長： それは分かっています。しかし私は、陪審員を混乱させたくありません。ですから「又はⅫ」の文字を加えましょう。これはローマ数字の12です。

マクレラン代理人： 私はそれを加えることに異議ありません。

裁判長： 結構です。さて、原告が要求した説示15ですが、私はこれを加えます、そしてあなた方にはコピーがあります。あなた方は、望むならばどうぞ読んでください。私が差し上げた紙片の最後に私が加えたのは、第1—いや、第2パラグラフです。

ヘイグッド代理人： はい、私は追加されたパラグラフの追加に異議はありません。

裁判長： マクレランさんは？

マクレラン代理人： はい、異議ありません。

裁判長： 異議がないのですね？ 結構です。それでは、私は、裁判所の説示の後に、代理人の要求にしたがって追加した説示を読まなければなりません。原告側代理人の要求に従って、10、11、12の一部、14及び15を追加します。そして、被告側については、私が前に言ったように、要求番号23の第1パラグラフを読まなければなりません、そして、説示のパンフレットから2.16を読まなくてはなりません。それで納得しますか？

マクレラン代理人： はい、その通りです。

裁判長： 原告側から何かコメントはありますか？ ヘイグッドさん、それでいいですか？

ヘイグッド代理人： はい、結構です。

裁判長： それではそうしましょう。次はあなたの最終弁論です。準備はできていますか、マクレラン代理人？

マクレラン代理人： はい、裁判長。

ヘイグッド代理人： すみません、明確にするために、できれば一裁判長、原告が要求した説示10と11を、特別に要求された説示15を読んだ後で、読んで頂けないでしょうか？

裁判長： いいですよ。その方が論理的です。被告側はそれでいいですね？

マクレラン代理人： 異議ありません。

裁判長： それでは、私はそれを15番のあとに読みます。さて、最終弁論の準備ができました。陪審員を呼びましょう。

(陪審員不在の非公開審理は1965年11月1日午前9時40分に始まり、裁判長による法廷への陪審員の再召集と共に、その日の9時55分に終了した。)

(続く)